第 13 回資源管理ワーキンググループ

議事録

日時：2018 年 4 月 3 日（火）13:00～16:00
場所：虎ノ門ヒルズ 9 階　会議室 RIO
出席者：崎田座長、杉山委員、森口委員、高橋委員、古澤委員
　　勝野オブザーバー、鈴木オブザーバー

※本議事録では、ディスカッショングループを「DG」、ワーキンググループを「WG」と記しています。

事務局：開会、委員変更、事務局体制について紹介

崎田座長：4 月で新体制となり、6 月に運営計画第二版の発表を控えて、最終段階に入っています。計画段階から実施段階に大きく変わるという時期ですので、新しい方々のお知恵もいただきながら、しっかり実施していただけるようなスタートを切っていただければ有り難いと思います。具体的な意見交換をしていただく最後の機会に近いということで、皆さんが課題意識を持っておられるところはしっかりとご発言いただくという機会にしていただきたいと思います。
　今日の議事次第をご覧ください。議事の一番は前回 WG の振り返り、二番が資源管理分野の全体的方向性についてです。そして、三番が最も時間が掛かると思いますが、運営計画第二版について、詳細な部分を出していただきましたので、ご説明を伺い、皆さんの意見交換という流れで進めていきたいと思います。第二版の意見交換は長いと思いますので、場を区切ってやらせていただきたいと思います。それでは議事の一番、前回の振り返りを事務局からお願いします。

事務局：資料 2 に基づき前回 WG の振り返りを説明。

崎田座長：前回ご発言いただいた中で、大目標や方向性に関しては、この次にご議論いただく時間を取りますので、それ以外に関して、ご質問やコメントがございましたらお願いします。私から一言、P1 の下から 2 番目でご説明がありましたが、前回、全体の横串を通すようなメッセージがあった方がよいのではないかという意見があった際に、組織委員会からも、それを今、検討中というお話がありました。持続可能性や、SDGs にしっかりと取り組んでいこうという話がありますので、横串を刺すような明確なメッセージを入れ

た上で、大目標などは作っていくということを共有させていただきました。それでは次の議題に進みます。資料 3 についてご説明をお願いします。

事務局：資料 3 P2 に基づき資源管理分野の全体的方向性について説明。

崎田座長：皆さんと何度も意見交換を重ねて参りました、P2 の大目標と全体的方向性の文言について、今日の段階でこの WG の意見を固めて欲しいというお話がありました。もちろん、今後パブコメなどもありますが、その前の段階での意見ということで、前回もかなりご意見をいただきましたが、今、事務局案として「Zero Wasting（資源を一切ムダにしない)」という明確な大目標を入れた上で、文言としては、「資源をムダなく活用し、資源採取によるサプライチェーンでの森林破壊・土地の荒廃等と、廃棄物処理による環境負荷をゼロにすることを目指して、全員で取り組む」という案を出していただいております。大きな論点になっていたのは、大目標について「Zero Wasting」ではなく「Sustainable Resource Use and Zero Waste」という表現がよいのではないかというご意見や、全体的方向性の文章に「森林破壊」や「Deforestation」という言葉を入れた方が世界の課題に対応しているのではないかというご意見があり、今回の修正案に入れていただきました。これに関して、委員の皆さまにご意見をいただきたいと思います。

古澤委員：パブコメでも指摘があった森林破壊の問題を入れていただいて、まとまったと思います。資源を無駄なく活用するということ、それから土地の荒廃等の入口側の話と出口側での廃棄物処理による環境負荷をゼロにするという形で、両サイドをにらんだ表現になったと思います。一点、細かいですが、「全員で取り組む」の全員とは誰なのか気になりました。運営計画全体の総論の部分で、何らかの考え方が示された上で、この資源管理パートに入るのであれば受け取りやすいと思いますが、もしそうでないのであれば、表現を工夫する必要があると思います。

崎田座長：今の「全員で取り組む」については、他の目標の文言とのバランスでここに必ず入れた方がよいのか、後程ご意見をいただきたいと思います。

森口委員：修正案はかなり具体的に丁寧に書き込んでいただいていると思います。その一方で、やや限定的に書かれていることによって、本当にこの対応でよいのか気になります。「森林破壊」を書いていただくのはよいと思いますが「森林破壊」の前に「サプライチェーンでの」という修飾語が入るのが適切なのか悩ましいです。森林破壊・土地の荒廃は主に資源採取段階のことを指しているのであれば、そこに付けた方がよいのではないかと思います。一方で、出口側の環境負荷のところは、元々は「廃棄による環境負荷を抑制する」であったので、丁寧に書けばこういうことなのかもしれませんが、私の理解では、

廃棄による環境負荷の抑制というのは、廃棄物処理による環境負荷だけではなく、過剰生産の結果、手付かずで捨てるようなことも環境負荷なので、廃棄による環境負荷という言葉であれば、リデュースをするということも含めて読めると思います。廃棄物処理による環境負荷となると、廃棄物処理だけを見ていて、ものを作りすぎることが環境負荷であるということが逆に読みにくくなるのではないかという気がします。ですから、上流で起きる問題、廃棄物処理段階で起きる問題、サプライチェーン全体で起きる問題、全てをカバーしていただきたいのですが、今の修正案の組み合わせだと、やや整合が取れないのではないかという印象を受けました。大目標の「Zero Wasting」というワーディング自身は、元々「Zero Waste」よりは「Zero Wasting」として、より広く読めるようにしてはどうかとご提案を申し上げていたので、こだわりがある一方で、ご欠席の細田委員から「Zero Wasting」は当たり前で、それでは何をやってよいのかがわからないから、もう少し書き込んだ方がよいのではないかというご意見もあり、「Wasting」の中では、資源側が読めてはいるが、「Waste」という言葉が出て行って、上流側の資源問題の重要性が伝わりにくいので、敢えて「Sustainable Resource Use」も入れた方がよいのではないかと思っておりました。キャッチフレーズはシンプルな方がよいという議論は確かにありましたが、他の柱の中でも、大気・水・生物多様性の辺りで、City と Nature の関係を両方向から書こうということで、長めのフレーズになっていたこともあったので、必ずしも短くする必要はなく、横並び上きちんと書いた方がよければそうすべきと上位の DG で話したこともございます。大目標は他の柱との横並びもあると思いますし、「Zero Wasting」で表しきれているという立場は変わっていませんが、両論あったと思いますので再度申し上げます。

崎田座長：今回、大目標はシンプルにということで「Zero Wasting」が最後に残りましたが、資源管理をもっと明確にした方がよいのではないかということで、「Sustainable Resource Use」などを付けた方がよいというご意見もこれまでにありました。前回、やはり大目標はシンプルにという流れでやってきたので、これでよいのではないかというご意見もかなり強くありました。そのような流れで、今回、事務局からこのような案で出していただいたという経緯があります。今の「Zero Wasting」に関してと、文章のところで、インプット側とアウトプット側ということを明確にしているのが、今回の資源管理分野の重要な点ですので、そういう意味でインプットとアウトプットが明確にわかる形で文章を書いてくださった修正案にはなっていますが、だからこそ、内容が限定的になっているというご意見もございました。杉山委員はいかがでしょうか。

杉山委員：各委員のご意見はごもっともかと思いますが、私が最初に読んだ時の感想としては、大目標も修正案もいずれも非常にわかりやすくなってよかったと思いました。確かにサプライチェーンと限定してしまうと、川下、川上の話が限定されてしまうというところもありますが、最初に読んだ時の印象としては、サプライチェーンでの森林破壊・土地

の荒廃という言葉を付けることによって、よりイメージを掴みやすく、この言葉が入ってよかったと思いました。色々なご意見を伺っていると非常に悩ましいですが、基本的にはこの案で結構だと思っております。

崎田座長：全体的方向性について、現在の案は三行で出ていますが、これに森林破壊という今の社会のキーワードを入れて、全体をきちんと見ているということがわかるように、アウトプット側にも言葉を増やしたという流れでこのようなバランスになっていると思います。他のオブザーバー、委員の皆さまはいかがでしょうか。先ほど「全員で取り組む」という言葉について、通常このような言葉があると、誰がというのが逆にわかりにくくなるのではないかというご意見もありました。オリンピック・パラリンピックでは「全員」という言葉を結構使っていると思いますが、その時の「全員」の説明は最初に出ていますか。

事務局：第 1 章で組織委員会はもとより、東京都や国及びスポンサーなどのデリバリーパートナーの方々もこの計画を尊重して取り組んでいただきたいということを記載しています。

崎田座長：「全員」については、運営計画の最初に書いてあるので、それで全体を通してということですね。前回の修正でこのような案を出していただきました。しっかりと作っていただいたのではないかというご意見がある一方で、細かく書いたからこそ、考える余韻が少なくなったというご意見もあります。どの辺で落ち着けるかを、皆さまのご意見を伺ってから決めたいと思います。

森口委員：「資源採取による」という限定と「サプライチェーンでの」という修飾はどういう表現になっているのでしょうか。私の理解では、サプライチェーンという場合には、資源採取だけではなく、それから後の色々な業種が入るのですが、実際に森林破壊や土地の荒廃を起こす行為が何かというと、ある程度限定的になるので、サプライチェーンの最上流にある資源採取に伴うということを指しているのではないかと思いました。ただ、資源採取と書いても、自分たちは資源採取をしないではないかと言われないために、サプライチェーンとわざわざここに書いたというように読めばよいでしょうか。つまり、サプライチェーンと書かないと、資源採取による森林破壊や土地の荒廃というのが何のことか伝わらないから、ここに書いているのでしょうか。あるいは、資源採取段階以外でも、サプライチェーンによる森林破壊・土地の荒廃等を何か想定されているということでしょうか。

崎田座長：森口委員のご意見から、修正案を考えるとしたら、わざわざサプライチェーン

をここに入れなくてもよいのではないかということに落ち着きますか。

森口委員：あるいは、「サプライチェーン全体で資源をムダなく活用し」などでしょうか。サプライチェーン自体はどこかに入れていただきたいです。サプライチェーン全体で資源をムダなく活用して、環境負荷をゼロにすることはすごく大事だと思いますが、そのサプライチェーンという言葉が、森林破壊・土地の荒廃というところの前に掛かっていることに少し違和感があります。

崎田座長：後半の廃棄物処理による環境負荷ゼロというところまで全体が掛かるような形になった方がよいということでしょうか。

古澤委員：サプライチェーンが広い範囲であるのに対して、資源採取は逆に狭い範囲なので、「資源採取によるサプライチェーンでの」というと、言葉が逆になり、論理的に違和感があるということだと思います。ここの森林破壊に代表される土地の荒廃は資源採取の段階をターゲットに置けばよいと思いますので、それ以外のことがあるにしても、「等」で読める範囲ではないかと思います。このフレーズの中では、「サプライチェーンでの」を取り、「資源採取による森林破壊・土地の荒廃等」ということで、一まとまりになるのではないかと思います。「サプライチェーンでの」という言葉をうまく活かすのであれば、「資源採取」という言葉より前に持ってこないと論理的にはならないということだと思います。

崎田座長：あるいは、サプライチェーンを最後に持っていき、「資源をムダなく活用し、資源採取による森林破壊・土地の荒廃等と、廃棄物処理による環境負荷をゼロにすることを目指して、サプライチェーン全体で取り組む」などでしょうか。サプライチェーンを前に出すか、後に出すかはありますが、サプライチェーンを全体に掛かるようにするというご意見は大事だと思います。鈴木オブザーバー、勝野オブザーバーよろしいですか。

鈴木オブザーバー：大目標は我々ではない方々もこれを使って実際に活動いただくということになるので、わかりやすい方がよいと思います。その意味では「Zero Wasting」がよいと思います。修正案の文言について、サプライチェーンを全体の表現で使うのであれば、「資源をムダなく活用し、サプライチェーン全体での資源採取」あるいは、座長がおっしゃったように、最後の「全員」の前に「サプライチェーン全体で取り組む」という形にするのが収まりがよいと思います。

崎田座長：サプライチェーンを資源採取の前に持ってくるか、最後にするかでしょうか。

勝野オブザーバー：「全員」の中に使う人は入っているのでしょうか。サプライチェーンというと提供する側だけの話になってしまうので、利用する側の視点が落ちてしまうと思います。

事務局：組織委員会に提供される物品を前提としており、大会に必要な物品を供給する先として組織委員会が入っておりますので、組織委員会もユーザーとして取り組む対象に入っています。

勝野オブザーバー：組織委員会はサプライチェーンに含まれるのでしょうか。

崎田座長：その辺りの細かいことに踏み込むことを考えれば、「サプライチェーンによる資源採取」という形で前に出して、最後の「全員」はそのままにしておくというのが、一番収まりがよいということですね。サプライチェーンは資源採取の前に出し「サプライチェーンによる資源採取での」という感じにして、最後はこのままにしておいた方が、サプライチェーンが全体に掛かるのではないかというご意見が出ました。修正案はそのようにしておきたいと思います。

高橋委員：主語が全員でということで、第 1 章で記載されることと主語が同じである方が読み手としてはわかりやすいので、サプライチェーンは前に出した方が収まりがよいと思います。

古澤委員：森口委員からご指摘のあった、「廃棄物処理による」という部分ですが、その前段の「サプライチェーン」なり「資源採取での」という言葉とパラレルに並べると「廃棄物処理による」というと一つのアクションに伴うというようになってしまいますので、「廃棄による」あるいは「廃棄に伴う」など、要は下流側におけるということが明確になる表現の方がよいと思います。

崎田座長：廃棄物処理という単語が入ってしまうと、そこに限定されるので「廃棄による」という現在の表現に戻しておいた方がアウトプット側の全体に掛かってくるということで、色々と大事なご指摘ありがとうございました。大体落ち着いてきましたので、まとめると、資源管理の大目標はこのまま「Zero Wasting（資源を一切ムダにしない)」とさせていただき、その後に続く文章として「資源をムダなく活用し、サプライチェーンによる資源採取での森林破壊・土地の荒廃等と、廃棄による環境負荷をゼロにすることを目指して、全員で取り組む」という形で、今日の最後にもう一度ご発言をいただく時間を取りたいと思います。

森口委員：サプライチェーンという言葉の定義が非常に曖昧で、人によって受け取り方が異なるので、慎重にやっていただかないとサプライチェーンを本当にやっておられる方には非常に違和感のある表現になると思います。

崎田座長：先ほど私が申し上げたものを修正案とさせていただき、色々な方の目を通すということで、よろしくお願いします。大目標、全体的方向性についてご意見をいただきました。それでは、運営計画第二版についての議論に入ろうと思います。素案について、詳しくご説明をお願いします。

事務局：資料 4 に基づいて運営計画第二版（素案）について説明。

崎田座長：全体像を受け止めるという意味で全体を通して説明していただきました。今回の WG が第 13 回ということで、これまでの 12 回の WG を通して本当に熱心にご議論いただきました。方向性などに関しては、ご説明いただいた P8 までの中でまとまっているという理解でおります。今回、初めて出て来たのが、P9 から P14 までの部分で、組織委員会として各項目に対し、具体的にどのような目標設定をして取り組もうとしているかという内容です。この後の意見交換は、P9 から P14 までの具体的な部分に、今まで皆さまが思いを込めて発言されたことの具体像がしっかり盛り込まれているかということを中心に、ご意見を出していただければと思います。全体が長いので、意見交換を三つのパートに分けて進めたいと思います。最初から P8 までの部分も含めて、目標 1 から目標 3 までを第一パート、目標 4 から目標 10 までを第二パート、P12「2.2.5 廃棄物の分別」から最後までを第三パートと分けてご意見をいただきたいと思います。それでは、第一パートについて、目標 1 から目標 3 までを中心にご意見をいただきながら、その前に関する部分についてもご意見があればご発言をいただきたいと思います。食品ロス削減、容器包装等削減、調達物品の再使用・再生利用について、どれも大事ですが、まずは目標 1 の食品ロスから始めたいと思います。食品ロスに関して、食品廃棄物の循環利用は目標 7 に書いてあります。特出しで食品ロス削減というのは、SDGs の中でも、食品廃棄物あるいは、食品ロスについて、あまりにもムダが多いと強く言われている中で、今回の東京オリンピック・パラリンピックは食品ロスにしっかりと視点を向けようということで、早くから意見交換をして目標として入りました。この部分に関して、特にここでは定量的な目標は入っていません。なぜかというと、定量的な集計がこれまでのオリンピック・パラリンピックでもあまり進んでおらず、今回、まず定量的に把握するだけでも、大きなスタートになるということで、データを集計することを大事にするという話になっています。細かく色々な項目を書いていただいておりますが、この辺りで何かご意見があればご発言いただければと思います。私から一つ、選手村のメインダイニングは 24 時間食の提供を行うという記載がありますが、24 時間の提供だけではなく、宗教対応などを行うことも食品ロスが多

くなる要素の一つかと思いますが、ここには宗教対応のメニューを用意するということは特に書いていないですが、特に食品ロスの発生要因として、それを入れておく必要はないでしょうか。

勝野オブザーバー：ハラール対応は過去の大会でも行われていましたが、必ずしもハラールだから食品ロスが発生するということではないです。

崎田座長：勝野オブザーバーは、政府の食品ロス対応の会議やオリンピック・パラリンピックの飲食関連の会議にも出ていらっしゃいましたが、何か気になる部分はございますか。

勝野オブザーバー：これは決め打ちにはなっていないので、やれる範囲でやっていくという精神で書かれていると思います。組織委員会のマネジメント上、どこまでできるのかと思ったのが、供給量、消費量、残量を日々計測とありますが、座長もご指摘された通り、これまでの大会で把握をしていなかったということから考えると、画期的ではありますが、どこまで把握ができるのかと思います。あまり縛ってしまうとコストの問題にも関わりますし、ここだけ細かい記載になっているので、大丈夫でしょうかということを事務局に確認させていただきたいです。

崎田座長：ここまで細かく言ってしまい大丈夫かという優しいご意見でした。回答を伺う前に、私から、よくぞここまで書いてくれたと申し上げます。食品ロス削減に対する社会の関心が非常に高まってきた中で実施する大会として、まずは、どこからどのくらい出るのかがわからないと、その後の対策も立てられないという状況であり、全ての入口ですので、ここまで計画として書いていただいて、嬉しいと率直に思います。

事務局：具体的にどこまでできるのかということは、これからの協議事項になりますが、今は、考えられる対策として、検討の中に入れていきたいということでございます。先ほどの話に戻りますが、ハラールメニューへの対応については、資源のパートではなく、人権等のパートの中で記述をする予定です。

崎田座長：鈴木オブザーバーに伺いますが、循環型社会形成推進基本計画で、食品ロスと生ごみを 2030 年までに半減するということについては、現在、検討されているという理解でよろしいですか。

鈴木オブザーバー：はい。戻りますが、供給量、消費量、残量の計測については、ICT 技術を PR する場にも使えると思いますので、このくらいポジティブに書いてもよいのでは

ないかと思います。

崎田座長：IC チップなどを活用して、かなり細かいものの動きの集計をするような技術も進み始めているという話は聞いたことがありますので、色々な可能性があるという気がします。今、鈴木さんにお話いただいたように、チャレンジする意義があると思います。目標 1 について色々とご意見をいただきましたが、目標 2 の容器包装等削減についてはいかがでしょうか。

鈴木オブザーバー：レジ袋の話も記載がありますが、ここはかなり工夫ができる部分かと思います。例えば、マイバッグの販売をすると書いてありますが、オリンピックならではというようなことがもし可能なのであれば、多くのお客様や参加される方にとってもアクションがしやすくなると思います。前回、古澤委員から味の素スタジアムでのモデル事業についてお話がありましたが、リユースカップについても何かしらのブランディングができると、全体の削減につながるのではないかと期待感を持っています。

崎田座長：レジ袋について、東京都の様子を伺いたいのですが、確かレジ袋の無料配布中止などもこれからの大きな目標の一つに入っていたと思いますので、オリンピック・パラリンピックの機会に、是非、レジ袋の無料配布を中止するか、レジ袋に代わるものをきちんと作るのか、この辺りもしっかり話し合いながら具体的にしていった方がよいと思います。リユースカップの話も出ましたが、ここに書いてある流れの中でそうした話は今後、検討していくということでよろしいでしょうか。

古澤委員：レジ袋について、東京都では、関係者との意見交換会という形で進めています。その意見交換会の中でも、オリンピックを一つのトリガーにすべきというご意見もいただいております。リユースカップは目標 6 でリユース食器の利用に可能な限り取り組むと書いていただいているので、そちらの話でよいかと思います。

崎田座長：リオ大会でも例えば、開会式にコカ・コーラの飲料を買うと、カップに入れて提供してくれたといったこともありますので、今後、具体的に色々と検討する中で、できるだけ環境負荷の削減と社会へのインパクトがあるようなことが実現できればと思います。他に加えた方がよい視点があればお願いします。

森口委員：それぞれ分担して書かれたのかもしれませんが、目標毎の書き方のトーンが全然違います。何を書くのかということについて平仄を揃えた方がよいというのが一点です。目標 1 は極めて具体的に書いてある一方で、目標 3 は一般的なことが書いてあります。目標 2 の容器包装はかなり現場の具体的なことについて書いてある一方で、容器包装

の削減と言った時に、この大会で使われる容器や包装が何なのかがわからない気がします。暑い時期の開催ということを考えると飲料容器は避けて通れないと思います。食品の部分はかなり具体的に書いていますが、容器包装のところで重点になるのは何なのか。以前、議論したと思いますが、具体的にどこを減らすことになりますか。マイバッグはお土産に持って帰ると思いますが、そうではないところで相当大量に容器包装は使われると思いますが、そこが見えないです。

崎田座長：物品の調達、準備のところでの容器包装が大量に発生します。これが大問題です。準備段階、調達物品の容器包装をできるだけ減らす工夫は大事です。そこは明確に書いた方がよいのではないでしょうか。

森口委員：座長のご指摘はその通りだと思います。容器包装リサイクル法の対象である、家庭に買ってきて排出されるものを中心に書いてありますが、厳密には中食的なもの、外食的なもので発生する容器包装がたくさんありますが、これが外で消費される際には事業系一般廃棄物、厳密にはプラスチックなので産業廃棄物になります。更に調達段階でも相当の容器包装は使われており、これは容器包装リサイクル法には含まれません。消費者が持ち帰るものはごくわずかです。容器包装リサイクル法のものだけを対象とすると議論が矮小化されてしまいます。ぜひ容器包装リサイクル法ではないところにも目を向けて欲しいと思います。

崎田座長：容器包装リサイクル法の容器だけでなく、全体を見て欲しいというご意見かと思います。そういう意味で、運営段階で出るものと最終的な大会の経過で出るもの、その辺りを増やした方がよいと思います。運営段階のものはここでも議論してきましたが、選手村のダイニングの食器については食品廃棄物の発生抑制に書いてありますね。

森口委員：目標 1 にも関連しますが、観客はどこで、どういう包装に包まれたものを食べるのでしょうか。ファストフード的なものをイメージすると、かさばるものが相当な量出ると思います。

崎田座長：ご検討中だと思いますが、リオだと紙で包んだバーガーのようなものが主流でした。ロンドンはそれをバイオプラスチックにして、生ごみと一緒に捨てていましたが、日本はそのような選択肢を採らないという話し合いをしてきました。

森口委員：冒頭にある「スポンサー・ライセンシー・サプライヤー・場内売場などと連携し」という部分に、実はものすごく具体的な言葉が詰まっていると思いますが、書けないということもあると思います。

崎田座長：実は容器包装の部分で考えなければいけない要素はたくさんあると思いますが、細かく記載されていないのは、事務局で検討中であるためという理解でよろしいでしょうか。

事務局：量的なところについては、まだ定量的に出しきれていません。ご指摘の通り、サプライヤーのようにものを納入していただく部分と場内売場のように観客に出す部分と両方をまとめて、梱包材・包装材として書いているのが現状です。

杉山委員：目標１の食品ロスのところに、過去大会からの推定とありますが、容器包装については、過去大会での発生量はどの程度わかるのでしょうか。

崎田座長：過去大会のデータは、どういうやり方で取るかによって数字は変わるので、比較はできないと思います。運営時廃棄物の内訳はどの程度把握できていますか。

事務局：ロンドンでは１万トンという情報があります。観客等で使われる紙容器、食品廃棄物などが多いようですが、ペットボトルや紙もある程度の量は出ています。

崎田座長：確かにそれぞれの会場でどのような廃棄物が出る可能性があるかということについては、１年前に大きなデータを出してもらいましたが、もう少し詳細なものがないと量が出てこないですね。調査はしていらっしゃるのかもしれませんが、データは把握中という理解でよろしいでしょうか。

事務局：前回の WG ではロンドンの量から推計して数字をお示しし、それでご議論いただきました。

崎田座長：現実的にどのようなところから、どういうものがどのくらい出るのかを把握されている最中だと思います。それを踏まえて準備・運営とその後の段階でしっかりと取り組む必要があります。文章的にどこまで書けるかということはあると思いますが、まだまだシンプルであるというご意見だと思います。どういう形態で料理や飲み物を出すのかということが内部で決まらないと見えてこないということでしょうか。

事務局：どのような容器で提供するかというのは、各競技会場で統一したものではなく、既存会場の売店等との調整をしながら、各会場で異なるものになる可能性もあります。量については、過去大会の明確な数字はありませんが、総量として１万トンというのは出ており、その内訳にはプラスチック以外にも紙やペットボトルなども含まれます。

崎田座長：今のお話で現実はよくわかりますが、一つ申し上げると、札幌でアジア大会が行われ、私も視察に行きました。元々の競技施設での売り方というのがあり、一つ一つに包装材がたくさん使われていました。今回も借りる施設が多いですが、組織委員会として最低限こういう環境配慮はやりたいということをしっかりと出していただいた方が、施設運営者側も自分たちが何を期待されているのかよくわかると思います。

森口委員：大目標の文章を議論した時に「全員で取り組む」というのがあったと思いますが、実際に容器包装を削減できる主体は誰なのかを冷静に考えた方がよいです。精神だけ入れても、なかなかやりにくいだろうなと。特に場内売場などは今までの慣行を変えていただくのは難しいので、ある程度まとまって供給をされる主体に何か努力をお願いしないと難しいと思います。一行目の「連携し」という部分ですが、具体的にどういう方法でやったら担保できるかという実現手段を考えておいていただきたい。

古澤委員：場内売場に関しても、オリンピックではスポンサーシップの関係で、色々なお願いをすることになると思います。その時に、どのようなものを使うのかということについても、一定のお願いをすることができないかと思います。削減も、そこから先のリサイクルも含めて全体のコストにも大きく関わります。例えば、色々な種類のものが増え、さらに分別をしなければならなくなると、制約にもなります。

崎田座長：現時点では、ここまで書くのが精一杯かと思いますが、色々なご意見を参考にしていただいて、組織委員会として資源を大事にして皆さんに楽しんでいただく大会にするという方針をしっかり伝えていただいて、実現させるように努めていただきたいと思います。目標 3 は数字の目標値が出ていますので、ご意見をいただければと思います。調達物品で、できるだけレンタルやリースをして廃棄に回るものをなくす目標値として 99%、これはかなり意欲的な数字ですが、使用期間が短期間とわかっていますので、しっかりと取り組んでいただく必要があります。この点に関して、ご意見はいかがでしょうか。詳しいことは記載されていませんが、数字は出ています。今までの意見交換の中でも、最初からレンタル・リースを活用するか、どのようなものが出るかを早めに情報把握して、事業者向けのリユースの情報サイトを立ち上げるといったことをしっかりやれば達成できると思いますが、そういうことをしないと達成できないと思います。

森口委員：レンタル・リースの割合がどの程度で、それ以外の再使用がどのくらいという目算はありますか。形式上はレンタル・リースがリユースと言えますが、実際、レンタル・リースしたものが複数回使われるという担保はどこにもないので、すごく厳しく言うと、グリーンウォッシングと言われかねないような表現かもしれません。本当のリユース

であるということをどのように担保するのかは、レンタル・リースという契約形態だけでは少し危ないという気がします。

崎田座長：仕様書の段階で、レンタル・リースの場合でも、返却後に再使用するという前提で書けないでしょうか。確かにレンタル・リースで調達したものを返却しても、その会社はすぐに捨てましたというのは困ります。

森口委員：数字を無理に大きくするのではなく、作っている主体の責任で、できる範囲を能動的にやった結果、ここがやれましたと言わないと、現実にあるシステムに依存して見かけ上、数字が上がっているという形はよくないのではないかという類似の議論が他でもあります。数字を大きくするよりは、我々が直接的に関わる形で底を上げているということが見える形を目指していただくのがよいと思います。

崎田座長：すごく大事な指摘ですが、ホテルの廃業時に物品をリユースする事例を聞いたことがありますが、99%を達成しているところも現実的にあると聞いています。目標数値を敢えて下げる必要はないと思いますが、レンタル・リースを返却すると、すぐに裏で廃棄されていたということにならないようにすることは大事かと思います。

事務局：再使用率を高めるために、業界の方にヒアリングをしています。大会の場合には、会議室の机などの一般的なものから特殊な用具まで、非常に多くの物品を使用しますので、そういったものがレンタル・リースできるかと伺いましたが、業界の方は積極的で、予めわかっていれば、対応しますということでした。ただ、業としてやっているので1回しか使用できないものについては、レンタル商品としては扱えないという話はありました。御心配には及ばないと思っておりますが、予めもう一度使用するということを仕様書や入札時に確認するという方法はあると思います。

崎田座長：次に進みます。目標4から目標10に関してご意見はいかがでしょうか。

杉山委員：目標10について、廃棄物由来CO2の削減ということですが、ここで言う廃棄物由来とは、廃棄物処理に限定されるという理解でよろしいでしょうか。

事務局：大会全体のCO2も把握しますが、ここでのCO2はおっしゃっていただいた通り、廃棄物処理の際のCO2ということです。

森口委員：大目標のワーディングについて、最終的には文言を取っていただきましたが、最初の案では「廃棄物処理による環境負荷」という書き方になっていました。そうすると

法律上の廃棄物に限定したとしても、廃棄物そのものに含まれている炭素に由来する CO2 以外にも廃棄物処理に伴うエネルギー消費の CO2 は出ます。それが入っているのかどうか。3R の活動に伴っても間接的には CO2 は出ますので、そういったところも含むのか。そこのバウンダリーをできればもう少し広げた方がよいと思います。廃棄物由来の化石資源由来の CO2 を下げるというスコープ 1 的な視点は大事ですが、本当にそれだけなのか。リサイクルをすることで、かえって CO2 排出量が増えるという批判が出る可能性にも注意が必要です。

崎田座長：製品そのもののフットプリントは計算されていますが、リユース・リサイクルの過程をどう評価するかというのは、今のところ難しいという理解でよろしいでしょうか。

事務局：排出量を把握するという話と対策による削減量の把握と、両方ありますが、ここでは、まずは排出されたものを把握しようという考えです。一方で、気候変動の方では、レンタル等が進んだことで、どのくらい減ったかということを捉えていきたいと考えています。

崎田座長：脱炭素 WG でその辺りの意見交換はされているということですので、委ねたいと思います。こちらでもそのような意見が出ていることはお伝えください。それでは目標 4 から目標 9 に関してですが、私から目標 4 について、建設工事の型枠や鉄筋など大事な話です。ユニフォームにリサイクル素材を使うこともすごく大事だと思います。ペットボトルも飲料提供事業者が積極的にリサイクルする場合は、ボトル to ボトルに取り組んでいただくように組織委員会としても期待を表明するという意味では大変重要なことだと思います。目標 5 の入賞メダルですが、都市鉱山メダルのことを 3 行だけでさりげなく書いてありますが、後々この計画が英訳されて世界に発信される時に、もう少しこの部分を具体的に書いておいた方がよいと思いますが、いかがでしょうか。小宮山委員長も街づくり・持続可能性委員会において、発信力のあるキラーコンテンツをしっかり入れるようにとおっしゃっていました。

事務局：都市鉱山については、参加・協働のパートで取り上げて、詳しく記載する予定です。

崎田座長：それであれば、ここには「詳細は参加・協働のパートで記載しています」という趣旨の文言を書いてはいかがでしょうか。

鈴木オブザーバー：大谷課長と同じ見解でした。エンゲージメントの部分で取り上げると

いうことかと。

崎田座長：ここには目標数字がでていませんが、全国からの回収がとても大変だというのは理解していますが、うまく 100%が達成できれば 100%再生金属活用の初の大会という風に呼び掛けていると思いますが、ここではあまり 100%という数字は入れないでおくということでしょうか。

事務局：このページで目標を少し変えて出すと整合が取れなくなりますので、メダルプロジェクトで進めていることを記載しようと考えています。

崎田座長：メダルプロジェクトの中で目標を考えていますが、それをそのまましっか頑張ってもらうという意味で、資源管理パートの中で目標値を入れるということではないということでしょうか。

事務局：書くのであれば、メダルプロジェクトと同一のものを書くことになると思います。メダルプロジェクトではリサイクル率 100%を目指しますと書いていますので、そのように書けるよう調整します。

崎田座長：リサイクル率 100%を目指すことを訴えて、回収率を上げるというのは大事なことだと思います。目標 6 はどうですか。運営時廃棄物の再使用・再生利用について、ここで食器の再使用・再生利用という項目がありますので、できるものはリユースにも努め、それができない時には再生利用を行うと明確に書いてありますので、全ての場合で食器類、容器類に関してそういう配慮をして欲しいという意味でよろしいでしょうか。

古澤委員：最初の議論に関わりますが、ここはまさに、観客が参加する場面かと思います。先程の「全員」の中には観客やボランティアも含めるということだと思います。特に 3R に関しては色々な方に関わっていただかないと何もできないというのが現実ですので、大事なところかと思います。

崎田座長：この後に、管理推進体制の話も出ますので、そこでの表現がそれでよいか確認ができればと思います。

勝野オブザーバー：目標 2 には削減とありますが、運営時についてあまり書かれていない一方で、目標 6 には削減という言葉が出てこないので、その辺りを確認させていただきたいと思います。

事務局：目標の切り方として、リデュース・リユース・リサイクルで目標を切って入れてきましたので、削減に関して入れるのであれば、目標 1 や 2 に入れるという整理で進めています。

崎田座長：例えば、目標 2 に調達時段階の発生抑制、運営時段階の発生抑制と入れるなどといったことを考えていただければと思います。目標 6 の再使用・再生利用については何度も皆さまで議論しました。選手村において、リユース食器で提供するにはどのくらいの食器が必要で、どのような洗浄施設が必要かなどの検討をしました。もしそれが難しい場合は、例えば紙皿・紙コップなどもあると思いますが、その場合もしっかりと再生利用を行うという話し合いをしてきましたので、ここは大変重要です。紙皿・紙コップについては、例えば、選手村ダイニングで使用した紙容器が、トイレットペーパーになって戻ってくるというお話もありました。そのような話も踏まえて検討していただければと思います。

古澤委員：目標 6 で運営時廃棄物とあり、最後に説明が入っていますが、言葉を再度整理した方がよいと思うのは、運営時廃棄物等と出てきて、その前に調達物品、後のところで建設廃棄物等とあります。P5 で大会に関わる資源の主要な流れという図がありますが、この部分に該当するという説明があると整合が取れると思います。

崎田座長：見ている方にわかりやすくというご意見でした。目標 6 で運営時廃棄物の再使用・再生利用率で 62～65%という数字が出てきています。このくらいの幅で出すのか、この幅の中の数字を何%ということで出すのか、ここでの議論を踏まえて数字を決めるということですか。

事務局：およそこのくらいという意味で数字を出していますが、一つの数字に決めるという方法もあると思います。

崎田座長：ペットボトルや紙など、100%再生利用をして欲しいというものもありますが、運営時廃棄物全体の重量を測ると、この程度の数字になるということでしょうか。

森口委員：かなり野心的な目標だと思いますが、再使用・再生利用率は定義が曲者です。今、想定されているのは、全体で発生した廃棄物のうち再使用・再生利用に向かった割合ということでしょうか。向かった後で当然またロスが出ますので、そこの歩留まりを計算しないと、実際の再生利用ではないのではないかという議論はあちこちで出ています。例えば、容リ法でもマテリアルリサイクルに向かうのは半分程度です。それでも向かうことが大切ですが。現実感のある数字として、どうやって 6 割を稼ぐかと考えると、それなり

に厳しい数字かと思います。重量比で見ると、紙などが多くあり、それが古紙に向かえば相当程度いけるとは思いますが。色々なものを足し合わせてこの数字というと、結局リサイクル率というよりは、重さの違うものを重量平均した、やや意味の乏しい数字になってしまう気がするので、本当は物品毎に決めた方がよいのでしょうが、見せ方の問題ですね。

崎田座長：ものによっては 95%など高いものもあると思います。やればできるものを敢えて下げる必要はありません。ロンドンは 63%ですか。

事務局：62%が実績です。

崎田座長：ロンドンについては、資源化に向かった量のうちロスはどうなったかご存知でしょうか。

古澤委員：ロンドンの場合は大規模な選別施設に入れて、そこで選別をしてから各リサイクル施設に向かった量で計算されています。元々の流れ方が日本で実施できるものと違います。

森口委員：違うということは、日本では大規模なソーティングを掛けるということは想定していないということが決まっているという理解でよろしいでしょうか。

古澤委員：私が知る範囲では、日本ではオリパラのために手を挙げる企業はないと思います。大会後のビジネスも成り立たなければなりませんので。

崎田座長：今の日本のペットボトルや紙、食品などのリサイクルの状況から考えれば、この数字は達成して欲しい数字ですので、62～65%と幅を持たせて出すのか、65%と出すのか、あまり高くしすぎるのもよくないというご意見もありました。また最後にもう一度数字を確認させてください。次、目標 7 に進みます。食品廃棄物の再生利用について、これは事業系の場合、年間 100 トン以上は報告義務がある食品リサイクル法がありますが、それに準じて率先してやるということですか。

古澤委員：誰が排出事業者になるかということによります。例えば選手村の場合はケータリングということになっていますが、ケータリングは食品リサイクル法の対象業者にはなっていません。

崎田座長：なっていないとすると、ここは自主的に取り組むことで、だからこそ数字は書

いていないということなのかもしれないですね。外食産業は今、リサイクル率目標 50%ですよね。それが出来ているのが 24%くらいということで一番の大課題です。これだけ管理が行き届いた場所で食品廃棄物が出たら、やはりできる限りの再生利用をしてもらうのは当然のことだと思います。

杉山委員：「全量を」ということではないでしょうか。

崎田座長：全量の再生利用を目指すと書いてあります。飼料化、肥料化、バイオガス化という優先順位は食品リサイクル法にはありますが、東京近郊で期間限定で受け入れられる施設があるかという調査はしていますか。

事務局：一定の調査はしておりますが、より詰めた調査をしていく必要があると思います。

崎田座長：飼料化はヨーロッパ等ではあまりないので、EU の色々な事業者は、日本の飼料化に非常に興味を持っておられますが、飼料化の会社だけでできることではないと思いますので、飼料化、肥料化、バイオガス化について、しっかり考えて欲しいと思います。目標 8 はいかがですか。

鈴木オブザーバー：食品リサイクルの話において、ケータリングが対象かというところで指摘があったと思いますが、外食産業という形態で入るのか、あるいはケータリングがどう言う形なのか、基本的に対象と考えますが、確認を取りたいと思いますので、後程また議論をさせてください。

森口委員：見た限りでは、持ち帰り配達飲食サービス業、給食事業者という業種で、食リ法に基づく基準発生原単位の資料で、ケータリング会社の数字が出ているので、場合によっては対象になるのではないかと思うのですが。

古澤委員：事業の実施形態にもよるということですね。

崎田座長：バイオガスを使って聖火を灯したらどうかという事業者や NGO からのご意見もありましたが、調整は進んでいるのでしょうか。トヨタさんが水素、他のところからはバイオガスという提案もあります。

事務局：非常に大事なお話ですが、注目される部分でもあるので、限られたところで話をしています。こちらから要望は伝えております。

崎田座長：バイオガスから水素というのは、大量に作るのは大変なコストですが、例えば福島の再生可能エネルギーから作った CO2 フリー水素と、食品廃棄物からできたバイオガスを組み合わせて会期中の聖火を灯すということはあるのではないでしょうか。

古澤委員：オペレーションや環境への影響を含めて考えると、聖火に使うことについては慎重に考えた方がよいと思います。バイオガスをどのように持って来るかも含めて考えなければいけない要素が多くあります。

崎田座長：水素かバイオガスかというよりは、バイオガスから水素を取り出すという選択肢もあるのではないかという趣旨で発言しました。目標 8、建設廃棄物等の再使用・再生利用についてはいかがでしょうか。再資源化・縮減率 99%以上、建設発生土の有効利用率も 99%以上、普通から考えたら、非常に高い目標ですが、限られた場所での限られた事業ですので、この程度はやってくださいという数字です。それでは目標 9 について、選手村のビレッジプラザで、日本の木材活用リレーということで、全国の自治体から集めた木材を活用して使用後に戻すというのは、内容的には全国とのつながり作りでよいことですが、目標 9 の後半については、国産材とは特に指定をせずにバイオマス資源はきちんと活用するという話で出ているという理解でよろしいでしょうか。

事務局：はい。そうです。

崎田座長：調達の基準や森林の荒廃をなくすことなど、最初の目標につながることですので、しっかり取り組んで欲しいと思います。

森口委員：DG や委員会で再三、私も発言し、また NGO からの指摘もあり、具体的に問題がありますので、ここの書きぶりは非常に大事だと思います。資料 3 の短い文章の時に、森林破壊や土地の荒廃にかなり踏み込んで記載しています。一方でこれまで 10 個の目標を議論してきた中では、そういうのとは別の持続可能な生産消費全体に関わるような話をたくさんしています。大目標で特出ししている割には、ここの書きぶりが平板な書き方になっていて、取り組んでいるとしか書かれていない。調達基準を策定して取り組んでいるが、その取組が不十分であるという議論がある中で、ここにこれだけしか書かないのは、バランス上物足りないような気がします。非常に厳しい言い方をすれば、取り組んでいるが指摘されていて、十分ではないというのが現状だと思いますので、そういう認識のもとに、ここは一層しっかり取り組んでいくということを書いて欲しいです。

古澤委員：確かに現状になってしまっています。ここには目指すところを書く必要があり

ます。それに向けて進み、且つ大会のレガシーにつなげていくということに意味があると思います。これで終わるのではなく、次をどうするのか方向性として掲げれば、目指す大目標にどうやって進むのかということが見えてくると思います。

崎田座長：文章の作り方の問題ですが、『課題視して取り組んでいる』で終わるのではなく、『課題視して取り組んでおり、それが社会のレガシーとして定着するようにしっかり取り組む』という形の一文を最後に入れた方がよいと思います。

森口委員：調達に関して基準の策定はしていますが、その運用が趣旨に沿っているのかということのチェックが不十分なのではないかという議論があります。

崎田座長：きちんと調達基準が徹底されているかについて、社会からの関心が強いです。管理推進体制の部分で書かれていればよいと思いますが、修文を検討してください。

杉山委員：調達基準を策定し、その後どうなっているのかが大事だと思うので、文言はもちろんですが、実質的にどのように運用されているかということをご検討いただきたいと思います。

崎田座長：組織委員会には、しっかりと受け止めて対応していただきたいと思います。今後しっかり取り組むという方向で、修文可能か検討してください。

森口委員：調達基準を策定しており、その実践や運用状況の確認などを通じて持続可能な形で採取等がされた資源の利用にしっかりと取り組んでいく、というように将来性、積極性が見える文章をここに書いていただきたいという趣旨です。

崎田座長：それでは P12「2.2.5」から最後までについて、ご意見をお願いします。修文ではないですが「2.2.5」で CO2 のことだけではなく、例えば普通に入札して金額が安いというだけで発注するというのは困ります。やはり 3R の質を考えて、適切な事業者に委託するということをして欲しいのですが、この文章で大丈夫でしょうか。コストが高くなってもよいということではないですが、質の高いリサイクルは費用が高い場合もあります。「CO2 排出量の抑制も念頭に置き」だけではなく、質的にきちんと適切にリサイクルされる事業者に委託されるということが担保されればよいのですが、どのように書けばよいでしょうか。

森口委員：「2.2.5」が分別だけ独立して書かれているので、このような書きぶりになってしまうのですが、非常に気になります。容リ法でも分別収集の促進と再商品化は別々に分

かれており、まず分別して、その後にどうするか考えるという法律になっていることが問題と考えています。何のために分別するかはわからないが、まずは分別しましょう、その後で適切に再生利用しましょうと書かれていますが、再生利用のイメージが湧かない限りはどうやって分別するのかは決まらないはずです。後の行き先によって分別をどうするかというのは、ある程度固まりに掛かっており、具体的なイメージも見えて来ているような気がしますが、この書きぶりだとその辺が読めないので、少し具体的に書いた方がよいと思います。

崎田座長：具体的にというお話がありましたが、逆に具体的に書きすぎると、そこだけイメージが強くなるということもあるので、具体的に書きすぎなくてもよいと思いますが、私が、何を念頭にこの発言をしたかというと、目標 4 の再生材の利用で、水平リサイクル、例えばボトル to ボトルと書いてありますが、現実の社会の状況を考えれば、ペットボトルを集めた後、処理をする工場に資源が流れていくようにするためには、普通のリサイクルより、わずかでもコストが高くなるのではないかと思います。質の高いリサイクルということを、ここで提唱しているので、処理業者への委託という部分で、何か組織委員会の意思が反映されるように書いたらよいと思い、発言をしました。事務局はいかがでしょうか。

事務局：文言については検討させてください。

崎田座長：管理推進体制のところで、調達をしっかりやって欲しいということや、参加型がしっかり入っているかというご意見もありましたので、その点を踏まえて「2.2.8」や「2.2.9」についてご意見をお願いします。先ほど分別のところでもありましたが、会場内でどのように分別するのかについても、組織委員会が早めに決めてやらないと、色々なシステムに影響します。文章に書き込むのは難しいかもしれませんが、もう少しきちんと決めて社会に発信することも大事だと思います。キャンプ地についても、自分たちがどのような協力ができるか関心を持っている自治体や施設運営者もいると思いますので、早めに情報を出すことも必要かと思います。

古澤委員：「2.2.9」について、色々な人と関りがあるというのが大事なところですが、事業者に関しては、新規資源の投入と最初にあるように、調達にも関わってきます。調達の議論の中では、直接のサプライヤーに加えて、広くサプライチェーン全般に関しても調達コードには書かれていますので、「直接関わる」というのがどこまでの事業者に掛かってくるのか気になりました。この事業者は是非、幅広の意味でやっていく必要があると思います。さらに「ボランティアや観客」の部分には NPO・NGO も入ってくるのではないかと思います。

崎田座長：事業者のところは、文言修正ではないということですね。

古澤委員：表現にこだわることではなく、考え方として、広く受け止めて欲しいという趣旨です。

崎田座長：NPO・NGO についても大事だと思います。環境省でも中高生の 3 R 人材育成もやっておられるので、そういうものも活用して、また、東京都でも中高生のボランティア参加や環境学習に関心を持っておられると伺っていますので、そういう流れがうまくできるとよいと思います。

鈴木オブザーバー：総体的にこのように書いておいていただければ問題ないと思います。

崎田座長：全体的に何かご意見があればお願いします。加えて資料 3 にある SDGs について事務局からご紹介いただけますか。

事務局：資料 3 P4 に基づき運営計画第二版と SDGs の関わりについて説明。

崎田座長：持続可能な社会に向けて国連が呼び掛けている SDGs の 17 目標を大切にしながら取り組むということで、計画の前の方に明確に入れ込んでいただくという方向で進めていると持続可能性 DG では聞いています。資源管理分野の個別目標が具体的にどのように SDGs に関わるかについて把握していくということで、このような案が出ています。今ここで全て確認するというのは大変なので、ご意見があれば事務局に連絡するという形でお願いします。

古澤委員：こういう形の整理が可能なのか、正直疑問です。SDGs と資源管理がどう関わるのかを把握するのは極めて大事なことではあります。例えば、食品ロス削減と飢餓をなくすことの関わり自体を考えることは大事です。なぜ関わりがあるのかということを考えることこそ肝心なことだと思います。入賞メダルの再生金属利用というところで、SDGs の目標 8 を入れていますが、具体的に 8 の何とメダルが関わるのかというところこそが大事ですが、それが見えてこないと思います。入賞メダルの金属の問題については、金も紛争鉱物の一つです。そうすると強制労働の根絶とも関わります。どのように関わるかという議論が進むような整理をお願いします。

崎田座長：大事なお話をしていただきまして、本当はそれが当然ではあります。まとめは作った後に、こういうものを元に社会と対話型のディスカッションをするという意味でも

しっかりと見ていただければと思います。17 の目標の中に 169 のターゲットがありますので、それのどこに関わるのかについても触れるとわかりやすいと思います。

森口委員：古澤委員と座長に同感です。ゴールよりもターゲットに絞ってもらった方がよいと思います。色々なことに関係しますということだけが出ていると、ぼやけてしまいます。資源管理分野は、ゴール 12 の中のサブ目標に相当関わることがたくさんあると思いますので、そこを強調していただいた上で、他にも関係しますということを言っていただくとよいかなと。資源効率性の観点で 8 を書いているのか、強制労働で書いているのかによって文脈が変わりますので、ターゲットレベルで整理した方がより明確になると思います。

崎田座長：ここ数日でそこまで仕上げられるのかですね。最低限、目標で見ていくのですが、皆さまとの共有の中ではターゲットレベルで絞り込み、今後の社会とのコミュニケーションで活用できるような準備ができるとよいと思います。これを見た時に、私の感想としては、11 番と 15 番がもう少し入るのではないかと思いました。皆さまで意見交換をして欲しいです。

森口委員：SDGs との整理は、どの範囲でやっているのでしょうか。SDGs は街づくり・持続可能性委員会と特に関わりが深く、座長がおっしゃった目標 11 に関しては、どちらかというと街づくり側に近い話であり、大気・水・緑・生物多様性の辺りは目標 11 の中のターゲットの一部には直結してくるものがあります。資源管理の中だけでは議論しきれないこともありますので、力の入れどころのバランスによると思います。

崎田座長：SDGs のターゲットを明確にすることで世界に発信しやすくなります。ターゲットまでいくと今日の段階では辛いので、まずはゴールとの関わりについてご意見があれば、明日までに事務局までお願いします。事務局からいかがでしょうか。

事務局：目標 2、5、6、9 の修文及び「2.2.5」「2.2.9」記載内容検討、また SDGs のターゲットレベルでの整理をするという宿題をいただいたと考えています。今後は 4 月 16 日の持続可能性 DG に向けて本文を修正していきます。

事務局：資料 3 P7 に基づき今後の予定について説明。

崎田座長：今後、パブコメなどがありますので、皆さまの意見を伺ったり、修正する機会はありますが、何かありましたら先ほどの SDGs と合わせて明日までに事務局にご連絡ください。

事務局：お送りするタイミングは検討中ですが、16 日の DG に先立ちまして事前に資料をご覧いただければと思います。もう一点、先程ご議論いただきました、運営時廃棄物の再使用・再生利用率の数字についてはいかがでしょうか。

崎田座長：皆さまからご意見をいただければと思います。65%はかなりチャレンジングでしょうか。

古澤委員：副事務総長からも背伸びをするというお話がありましたが、65%は背伸びの範囲内かと思います。

崎田座長：背伸びの範囲で 65%にするということで。

事務局：わかりました。ありがとうございます。

崎田座長：これをどう実行するかというのが大事で、特に、この分野は社会にも非常にわかりやすい分野なだけに、しっかり取り組んでいただくことが大事ですし、大変ですが、今後のレガシーとして残る重要なところですので、しっかりとやっていただけると有り難いです。森次長からぜひ抱負をお願いします。

事務局：まずは第二版の中で大切な部分についてご議論をいただきありがとうございます。いただいたご意見を踏まえて調整、修正を早急にさせていただきたいと思います。私事ですが、昨年の秋頃からアドバイザーとして第三者的な意見を申し上げてきました。計画と実施は表裏一体です。それぞれの関係機関と一層調整をしっかりとしながら表裏一体で進める努力をしていくことが大事だと認識しております。引き続きよろしくお願いいたします。

以上